

旅日記掃寄集

特71

598

300991-000-5

特71-598

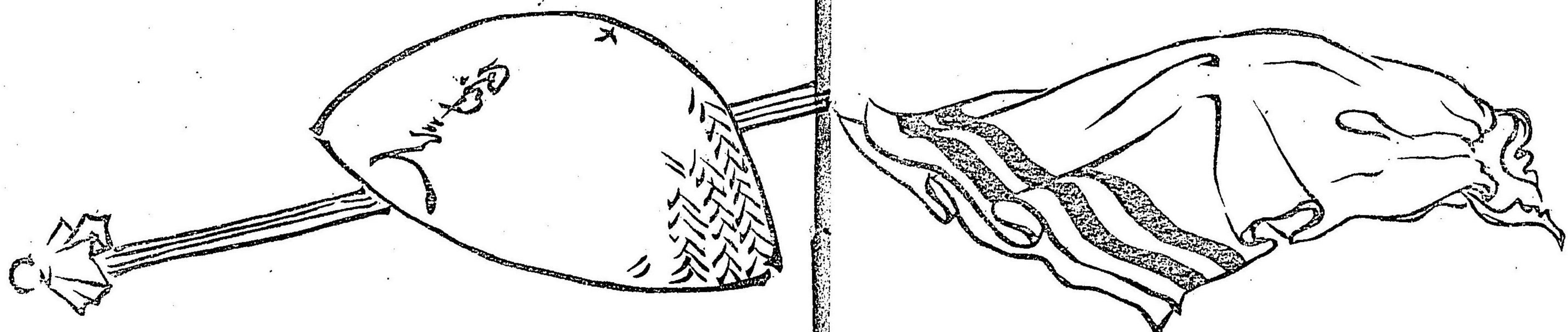
旅日記掃寄集

ADA-0009





林日記掃帚集

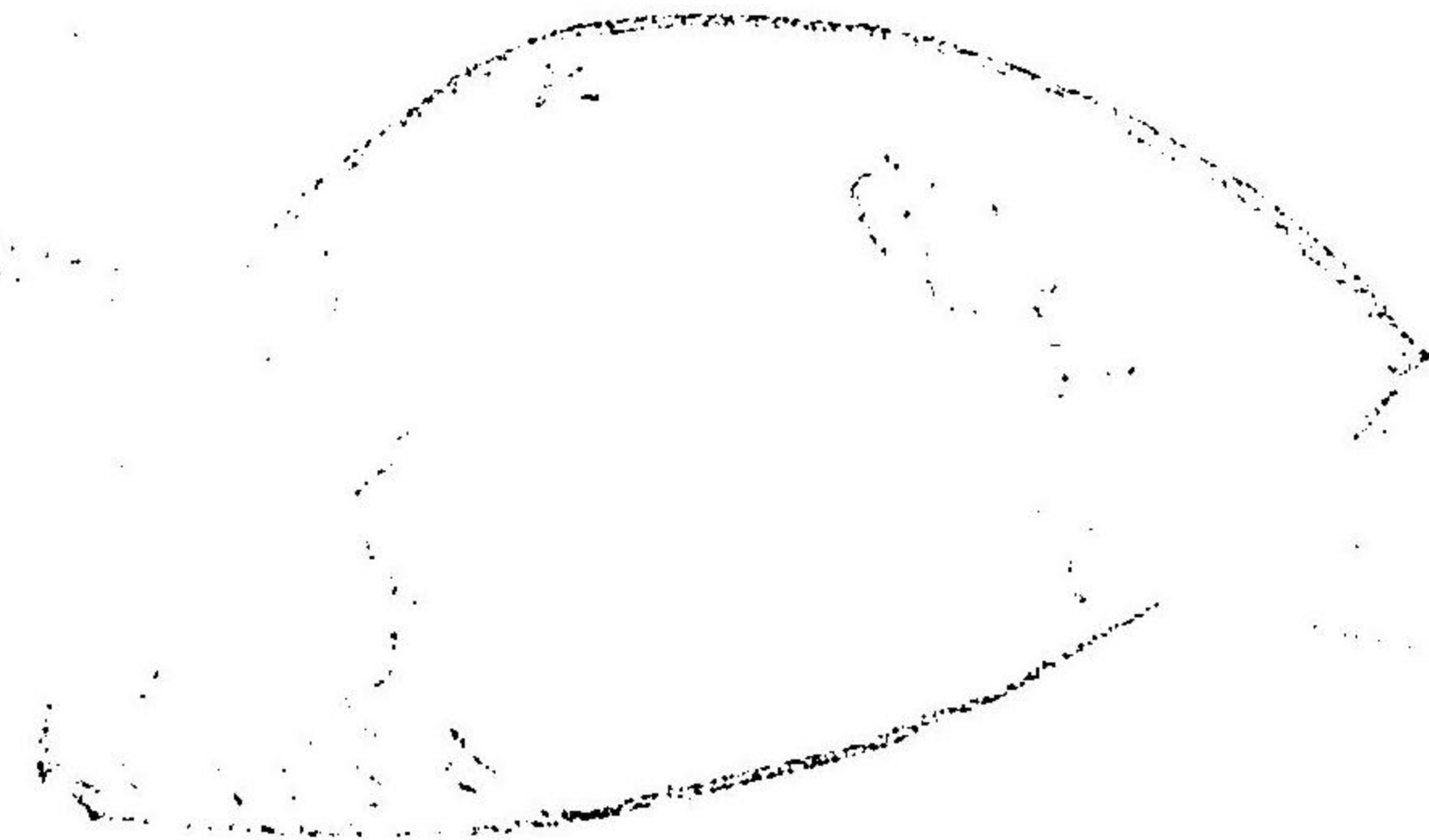




特71  
598



293.09



77W13872

# 旅日記掃寄集

四十年六月十四日午後十時新橋を發す。西比利亞の曠野を横切り歐米大陸を經る長旅程に上れるなり。プラットホームに立錐の地無きまでに打ち集ひて、わが行を送られたる人々の情のほどいと身に染みて覺えらる十五日朝米原にて列車を更へ敦賀より汽船バルチカ號に便乗、夜十時抜錨浦港に向ふ一行次の如し

三井三郎 助  
同 介 夫 人  
同 令 嬢  
三井 辨 藏



にて之れに井上角五郎氏の一行即ち

益	林	小	櫻	福	外	濱	河	平	井	林	岩	門
田	脇	脇	井	田	山	崎	井	野	上	一	村	田
二		源	信	秀	知		松	濱	角			敬
		治	四	五	三		之	子	五			止
		郎	郎	郎	郎	素	介		郎	男	圓	
	健	郎	郎	郎	郎							
孝												

を加ふれば十八名なり。

益田氏

何事の心にかゝるくまもなし

旅ゆく空に月をなかめむ

家つとになにかもてこん外國の

たひのかへりと孫もまつなり

世にたちておなし道ゆく友人に

しはしわかれもをしき旅かな

しはしそとあもへとなほもをしまれて

とまらぬものは涙なりけり

新橋に見送られし人は數を知らず

さりをたつところなさまておくりさし

人のなさけのふかくもあるかな

福田祐二



萬歳の聲におくられかといてに  
残る心もいさみけるかな

山縣含雪侯より

歐洲におもむかるゝ馬のはなむけに

ひらけ行鐵路のたひもこゝろせよ

夏なほ寒き西伯利亞の原

益田孝ぬしの外國ゆきにはなむけすとて高橋箒菫氏

しはしとてわかればをしゝ同しみち

たのしむ人のなしとおもへは

我もゆき外國人のよろこひて

君をむかふるさまみまほしゝ

をりくはつけおこしてよ外國の

月雪花をうつす言の葉

外國をみめくる君かもちかへる

つとはみくにの寶ならまし

もみちはの色つくころに歸りこん

君むかへはやすきやさよめて

十五日 晴 北風 十二時敦賀に着米原には長谷川銚五郎藤野米山氏等あり  
て送別す敦賀ホテルに入る乗船バルチカ號は港内にあれども魯國労働者の  
今夜來るものあり出帆は延刻すと

金崎神社に詣づ

此城は佐々木之時代三井家祖先が領せし處と聞しことあり、信長の爲に打  
破られ、遂に武士を止めたりと云ふ舊跡にて、そゝろに懷舊の思ひに堪へ  
ず。夜十時出帆月夜とも云へす。舊五月の節句に當れば港を出る時は既に  
月は入りぬ。

十六日 晴 うねりあり、こゝちよろしからざれども、食堂に就く。船暈を  
防ぐ薬も多少の効ありしか

船は兩國の汽車を接続するとは云へ八瀬より以上は走らす。



風もなく波も静にこの海を

わたるは神のめくみなるらむ

六

將遊歐米船發敦賀

林

歐米啓行由亞北

解纜敦賀社頭灣

一痕萬里船頭月

半照前程半故山

浦潮舟中

同

水雲漠々望將絶

波際何邊是韓山

憶起十三年前事

滿天風雪泊沙灣

十六日は波浪稍高かりしも平野女史を除くの外異状なし。由來船嫌の名ある益田氏さへ一度もテロブルを欠かされさりしを以て見れば海上の如何に穩かなりしかは推するに難からざるべし。此日の午後三時頃となり益田氏は河井を呼び

「今横になつて居る内にその戸が開いたかと思ふと私の黒い絹の烏打帽が見えない……首尾よくやられたそこでこうやつたがどうだ」

我身にはちと過ぎ物とおもひしに

絹帽ならで泥棒となる

「しかしたゞ出せと云つた所で出す等もないから……帽子をなくしたが見付て呉れたものには五留やると……懸賞したらあるすけのとだから出すかも知れない、」

と語る。黒絹の烏打帽は確かに見覚えあり。何處やらにてか見たる様には覺ゆれど、兎に角ボーイに尋させんとて河井は部屋を出て隣の食堂に入りしに帽子は正面の鏡下に置かれたり。後にて聞けば其邊は蟹甲將軍探されたりと云ふ。多分穴に入り居りて目には入らざりしならん。烏打帽は出てたり。残る問題は五留の懸賞なり。

泥棒とならで絹帽を手に入り

これか五圓てわしが頂戴

五留遂に河井の有に歸す。是れぞ道中狂歌の發端にして、爾後互ひに他の失策に材料を求めて一句を試みんとす。誰にてもあれ、一度何等かの失策

七



八  
を演せんか忽ち名句悪語の重圍を脱し難かりき。同じ日となり戦後の西  
比利亚を旅行するとの談話より

あだとのみちもひし國も雲晴れて

益 田

月さしのほる浦鹽の海

雲晴れて月さしのほる西比利亚の

河 井

蓬かつゆに袖はぬれつゝ

十八日朝、浦港着。午後六時の發車なり。手荷物は總計八十幾個なれば税  
關の手續汽車への積込に忙殺さる三井氏同令夫人令嬢及益田氏は井上氏と  
共に舊知己ブリチル氏の招待にて同氏の私宅に赴かる。定刻浦港發車領事  
郵船會社員其他多く見送らる。異域にありては、人の情誼特に嬉し。  
十九日、朝一同食堂車に集まる櫻井遅れて來り一老レディの前に空席を  
見出して座せんとせるに忽ち撃退せらる。櫻井少時茫然策の出づる所を知  
らず。

ばゝにまで一ひち喰ひし櫻井は

益 田

のぼせらうとてあわてける哉

起ぬけに婆の袖ひく櫻井が

河 井

あきれかへるのつらに鐵砲

又

朝めしに櫻井婆のひちをくひ

小 脇

正に小脇作を以て一位とすへし。是れも此日のとなり益田氏便所に入り、  
出でんとするに戸開かす。引くへきを推したればなり。櫻井隙さす

げにふかく雪隠つめとなりけり

一矢を酬ひしなり。是亦同日の出來事なるが、辨藏君ツボンの間より白禪  
を垂れ車中を横行濶歩す。然かも本人は心付かざれば平然たり。「レディ」  
連の恐慌想ふべし。

旅なればかくの次第と越中か

河 井

はし晒したるはだの迷惑

腰間にのこんの雪の白すぢは

櫻 井



辨藏君の恥のかきひも

一〇

汽車は夜哈爾濱に着せり。總領事館員及井上泰三長谷川作次滿鐵鎌田諸氏  
出迎はる。停車一時間半、馬車を驅つて市中見物に赴くもの、晝ハガキを  
求めんとするもの、ブヘーに入るもの、皆區々なり。福田祐二氏頻りにブ  
ラットフォームを散歩なし居りしに紙入を抜かる

ぬかれたがふくくだなど、祐二どの

河井

抜いたる奴はぬけたあろすけ

井上泰三氏より壽司を贈らる、時に取つての珍味なり。

小脇

はなむけに握つてくれた滿州の

のり巻すしで腹がはるびん

廿日の朝、井上角君の手荷物失せたりと云ふ多分預けたる分に混したるな  
らんと、車掌立合手荷物貨車を開き尋ぬるも得ず、歸つてクペーを見れば  
棚上にある。

てにもつに何の不思議はなけれども

河井

頭の上におくが間違

井角君に奇癖あり、食事の間必らず食堂に眠る。

食物がおそいとねむる井上は

益田

ボーイにつかれ起る角五さ

又

あの人の口に休みはなしと聞けど

櫻井

物喰ふ暇に居眠りぞする

海拉爾に到る。列車に故障生じ、停車約二時間。場内に行商集まる。多く  
はコーカサス人種、グルジンなり。粗製の絹ハンケチ、肩掛及金製馬鞭等  
を賣る。

巧みにも物をば人にうり附けぬ

益田

是れぞ名に負ふコーカサスの人

又

はいらるゝかはいられぬかは得ぞ知らね

同

一一



こゝは蒙古の入口ときく

松花江の鐵橋を渡りて談は戦時の物語に移りぬ。

鐵の網にふせぎの跡見へて

令夫人

戦の塙の忍ばるゝ哉

くろがねの橋も碎かんたましひは

益田

すめら御國の寶なりけり

又

ますらをぞそこのもくずと成りしてふ

同

月影やどるすんかりの河

滿州北部より西比利亞地方にかけては普通の鳥及カサ、ギと共に白頭の鳥

多し。

西比利亞の鳥とわしが白かしら

益田

はげたことをば云ふは禁物

一行中禿の進歩したるは三井氏にして白髮の優勢なるは益田氏なればなり

停車場即事

雄圖千萬里 鐵路壓夷華 阿什河邊驛 清奴賣野花

林

廿一日滿州西比利亞の國境を通過して

あれも喰ひたしこちらもうまし

河井

こゝが思案のまんちゆりや

マンチユリヤ停車場に税關あり。檢閲極めて嚴峻、携帯せる炭酸水に重税を課すべしと云ふ。眞面目に拂ふも馬鹿らしく、遂に官吏を瞞着し、客車に積む。

みずなればやがてすむべき炭酸の

河井

せきとめられてくゝる人の目

汽車の食事には追々飽きたり、今日は日本食を試みんとて、車丁を呼び、白米を與へ焚方を注意なしたるに、鍋を洗はず用ゐたれば、バタの香強く咽喉を通らず。

日もたゝぬ今日よりめしにこがれては

益田



行末すへが思ひやらるゝ

又

おろすけにたかせた今日の日本めし

河井

ばたくさいとぞ人は言ふなり

満州より西比利亞に入りては、満目茫々たる草野にして車外の景色毫も變

化を見ず。

益田

はしりてもくなほ走りても

同じ色なる野邊にぞありける

又

行く汽車の煙の末もかすみけり

櫻井

果しも知らぬ西比利亞の原

日本を出しより連日好天氣にて、夜に入れば月影いと澄み渡れり。

小石川

かけとむる山も木立もなき原に

大空清きしべりやの月

又

三日月のつる賀の浦を船出して

河井

今日しべりやの月をながむる

又

故郷のながめもまなじ月ながら

同

心さびしき西比利亞の原

又

木かげなき蒙古の原をうしと見しに

櫻井

シルカの河の月のさやけさ

此のシルカ河は黒龍江水源の一にて此邊より風景一轉し來る。

シルカ河逢瀬もうれし旅人の

益田

野山にうみし心あらはむ

夕方チタに着す。會々ゲテラル某轉勤赴任に際したれば、見送人多く、軍樂隊別離の譜を奏す。福田秀五郎氏倉邊車より下らんとして倒る。



樂隊に浮かれて福田それがしは

櫻井

からだかきひて五郎くちとちつ

チタ河口にて

旅つかれ忘る、計り空はれて

益田

月影清きチタの河口

廿二日、吹き送る蒙古の風は炎熱焼く如く、殆んど耐ふる能はず、寒暖計

は間もなく百度に達せんとす。

河井

深草の少将ならぬ九十九度

のぼせきつたる暑さにぞある

櫻井

夏來れば蟬の宿かる木だもなし

なくになかれぬ西比利亞の旅

晝の暑さに引かへ月夜の涼風は壯快得も言はれず。

林

西比利亞の月もかすみて見ゆるなり

賤が伏家の夏の夕暮

今日も又旅寝の窓につとひして

同

思ひく月の見える哉

故郷は夕顔柵の下すゞみ

櫻井

今宵の月に忍ばるゝ哉

バイカルに近づくに随ひ一帶の森林となり、山川の風光美しく氣候緩和、

山中所々残雪を見る。

木蔭れに見ゆる家こそとらわれの

益田

とがなき人の住居なるらん

薪木こそ實なりけれ西比利亞の

同

荒野もそまはいとうましやは

深翠木の間がくれの螢火は

河井

賤が伏家のあかしなりけり

植へつけし民草原の朝ぼらけ

林

木間がぐれに煙立つなり



森林はエゾ、トビ、落葉松、白樺の類にて、白樺別けて多し。

白樺の葉末をわたる朝嵐

馬子歌うたふ聲聞ゆなり

色白の姿やさしき白樺は

西比利亞原のながめなりけり

はじめての旅なればこそしらかばの

かへして見ればはからしくなる

夕方ペレヨブナヤに着す。小停車場なり。汽車に何等かの事故ありて、

停車稍久し。地はバイカル湖畔に位し清涼言ふ可らず。乗客皆下車して艸

花を摘む。鐘聲を聞かざるに、列車進行を始む。人々驚て飛付きしが、獨

り平野女史能はず、氣息奄々列車を追ふ。合客の英人某辛くも之を引揚げ

たり。

出しぬけに汽車に出られて大騒

客は残らず先づお目出とう

一ス

林

櫻

河

井

河

井

たしかねば出ぬか梅ヶ枝手水鉢

芝居にならぬ西比利亞の汽車

あやうくも今しゆんかんの平野嬢

やれ安心といはふ合客

しべりやのペレヨブナヤ停車場に

すんでの事でヒラノアブナヤ

自註に曰くヒはピと讀むコンピラのヒラの如し。

發車騒の前なり、共に艸原に下り立ち散歩なし居りしに、一行中の某放屁

一發、佛人爲めに驚けりと。

なんのその佛人ばらの膽けさん

バイカル湖岸河井發砲

屁一發湖邊の葦もそよぎけり

白砲の地ひびきなせる一發に

うみの波風立ちさわぎけり

同

同

小

脇

櫻

井

同

林



敷しまの大和男子の身だしなみ

筒の掃除にたつた一發

平和後の誓は又も破れけん

間近く響く石火矢の聲

バイカルで河井一發意氣張れば

かねもならぬに汽車逃ぐるなり

鼻持のならぬ煙の一發に

あたら月夜をだいなにしせり

空砲でもどさんものとおもいきや

實彈破裂河井大怪我

強敵にうしろ見せたと思ふなよ

兎本に出した大和だましひ

是より汽車は湖邊に沿ふて走る。名にし負ふ大湖海の如く、望んで際涯無し。

河井

林

櫻井

林

小脇

河井

さしとなみに入日のかげのかゞやきて

夕風すゞしばいかるの湖

笹波や志賀の浦にも似たるかな

月さへ渡るバイカルのうみ

たへかねし暑さも今はわすれけり

外山にのこる雪を見てより

連天積水渺茫間 七月湖頭白雪斑

恨莫晚鐘三井似 夕陽空設翠微山

見るからに心すゞしきばいかるの

みづうみさしによするさゞ波

み渡せば限り白雲しらなみの

空をひたせるばいかるの湖

小石川

益田

小石川

林

小脇

河井

貝加爾鐵道をとて

鐵道をつくりあげたる借金の

河井



ばいかるうへは返へす途なし

イルクイックに達せんとするや食堂車のストックに欠乏を告げ廿三日朝に  
及んでは既に食ふべきものなしと云ふ

河井

はむもなし又肉もなし玉子なし

人を茶にする汽車の食堂

イルクイックの乗換も無難に終り。午前八時西に向け發車。

林

イックかモイスコーしと日々に

手足も腰もしべりやの旅

此附近微小の羽虫群飛して呼吸をもなす能はず。土人皆網を以て面を掩ふ。

河井

髯つらにあみとかけたらなんととく

賣れ残つたる夏の牛肉

浦鹽よりイルクイックに至るの間は列車に浴室の設けなけれども、イルク  
イック以西は入浴するを得るなり。案内役たる河井之れを知らず、遂に他  
の人によつて發見さる。

風呂ありと豫て思はぬ失策も

小脇

あかも流してまづは安心

みずきかずかはい手をやく汽車の風呂

同

何はともあれ垢を洗はんとて順々に入る。

ゆあみして見れば目なれしけしきさへ

令夫人

あらたになりぬしべりやの原

風呂なしとおもひの外にロシヤ風呂

益田

汽車にもありて客をイリック

狂歌會始まる。題は汽車の風呂。投票の結果一等となりし者へは令夫人よ  
り賞品あるべしといふ。

先つ各自の歌を別紙に書き改め名を記さず何人の作なるや分らぬやうにな  
したるは殊に面白かりき。

江戸のあか西比利亚の野に流しけり

櫻井

露助のたいた汽車の据ふる



嬉しさにあとをもささもわきまへず

令夫人

とび込風呂のすべりやの原

長々の旅のあか恥水ならで

小石川

湯に流したるしべりやの風呂

しべりやのふろに思はずゆあみして

同

長き旅路は不老不死なり

車中に風呂のありとは知らぬ河井

福田

さりとは通に似合はざりけり

東京の垢を流して夕涼み

林

エニセー川に汽車飛ばしつゝ

垢はじをかき流したる汽車のふろ

河井

浅きはふかきめぐみなりけり

山鳥の尾長き汽車で久方に

濱崎

雨土まじるお湯に入りけり

小石川

おなかまに見られし人も風呂の爲め

益田

あかのぬけたる河井老人

ピリ／＼といたくなる迄こすりけり

令嬢

おもひがけなきしべりやの風呂

イリツクと覺悟定めし此旅に

平野

おもひがけなきオビのふろすし

久々で列車の風呂にイルクツク

岩村

今日こそながせ日本のあか

投票の結果遂に一等には令夫人作を推せり。

廿四日 辨藏君が朝起るとたん頭を電燈に打つけて一つ壊しぬ。

電燈と衝突したる辨藏さん

河井

おやどでなくて汽車で結構

でんとうの玉と頭の鉢合

小脇

たまをこはしてなんと辨藏



電燈と辨藏さんのなぐり合ひ

林 二六

濱町河岸はギヤマンの雨

今日の狂歌題は汽車の日本飯なり。

まつかいてもあらなさけなや日本めし

林

ホンニ浮世はまゝらぬかな

西比利亞の汽車にてたきし日本めし

福田

おもひもよらぬ馳走なりけり

おもひさや我國振のお茶漬を

令夫人

めしあかれとはしへりやの野に

ひとさじてよたれをなかすにほんめし

小石川

さすかしへりや牛の香をする

江戸を出て長崎ならぬ西比利亞に

濱崎

不倶戴天のかたきめしかな

故郷を忍ぶよすかの日本飯

門田

ろすけの給仕しへりやの米

これはしたりろすけのたいた日本めし

櫻井

消化かいゝとかはい言ふなり

西比利亞のはらはへれとも汽車のめし

河井

ありかたすきてのとへ通らす

西比利亞の列車の中の日本めし

岩村

マ、になるなら日々にくいたい

おもひさや海苔につけものくにのめし

福田(祐)

マ、になるなり西比利亞の旅

なか旅に久々たへた日本めし

令嬢

バタくさくともなんの事かは

あなられしと飯にとりつくジャップ見て

同

いふかしとこそヤンキの言ふ

のみおろすめしにはあれとさいなきに

濱町



手をスラフれぬ事の苦しき

只さへもめしのみにてはくへぬものを

同

こと更くへぬ飯のたき様

さつし入るみそらの國に生れては

益田

たらぬは米のめしにそあるらん

一等は林作と決定せり。

廿五日 バイカル東よりタイガア迄は深林にして、夫れより烏拉爾迄は又  
草原なり。停車場につく毎に小兒か艸花を賣りに来る。いと愛らし。小束  
一把の價五哥。

西比利亞のひなの住居のたをやめは

小石川

皆くれないの衣着にけり

毎日ノンキには暮すとは云へ、夜も晝も流車の中、況して見るものは、千  
里の艸原のみ。無聊耐へ難し。

腰折の歌も無理なし汽車のなか

小石川

ひねもす椅子にかけとほす身は

あきて見つ寐て見つ汽車のせまき哉

櫻井

あしもしへりやこしも西比利亞

春もなく又秋もなき西比利亞は

益田

夏こそ花の匂ふ頃かな

八千草の花のさかりとさきにほひ

同

秋とそ思ふ西比利亞の原

しへりやの果しも知らぬ汽車の旅

櫻井

たはこノムスク日をクラスカや

西比利亞の大海原に立つ波は

河井

風に千草のそよくなりけり

情ある人に伴ふ身の幸は

小脇

旅のうさをも覺へさりけり

故郷にあるかと思ふおもひ寝の

同



夢おとろかす汽笛一聲

しべりやの荒野もしはし賑ひぬ

打連れ立ちし大和撫子

あゝさいとひろいはろしやのち持前

そう身に智恵かまわりますまい

鐵路ゆく旅なればこそ身もやすく

まのあたり見る西比利亞のさま

オビ河の鐵橋を越ゆ。

結ひてしオビもほとけて數千里

たれし小便北極に落つ

長流なること思ふべし。

例に由り狂歌會始まる。題は花賣なり。

召せくゝと里の乙女子柳腰

みとりの衣に紅の花

櫻井

益田

同

益田

小石川

令夫人

濱崎

林

令嬢

福田

櫻井

なにがし

花賣の花はかひたしろしや語の

また通辯もかはみそうなり

しべりやの里の乙女か賣に来る

わすれな艸はなんの心か

花よりも團子に似たる乙女子か

一把五錢てハラシヨウと云ふ

はな賣に十コベツクをまさとられ

あとて頭をかいたのは誰

めしませと客にしへりや取る黄金

花賣むすめはなたらしつゝ

君かへやしへりや草の可愛らし

娘かずくゝ花もかずくゝ

あな可愛小供心に花をつみて

千里の客をなぐさめんとは



乙女子かめせよとさゝく花束に

ふる里忍ぶ西比利亞の原

今日の月桂冠は、又々令夫人の手に落ちたり。

廿七日の十二時頃、經過せる地方は塵甚しく窓を閉つるも更に甲斐なく、人々さながら粉屋の丁稚の如し。

ちりひぢで出来たる此身今更に

何かおそれん瀛車のほこりを

鐵道沿線に馬多く放たる。歩き様の、おかしければ、井角將軍は日露戦争に用ひし廢馬に擬せしと主張す。

我足を結びしひもとさもやらて

ピッコの馬と人はいふなり

むまらない達者の我を片眼なる

ニッポンスケかピッコとそ云ふ

野景のみ多きロシアの舞臺には

小 脇

益 田

河 井

小 石 川

林

馬の足のみ踊りけるかな

午前十時四十五分烏拉爾山嶺を越ゆ。歐亞兩大陸の境なり。

永々と世話になりしシヘリヤも

これとお別れハイ左様なら

西比利亞を攻め落したる其足て

直く進撃の心地をそする

小氣味よしうらるの山の下り阪

木魂にひしく瀛笛一聲

亞つと呼び歐と答ふる其ひまに

うらるの嶺を瀛車越にけり

馴れし西比利亞あと白雲と

とんて超へたい烏拉爾山

その時は歐亞二州を一跨け

うらる山歐亞二州の背合せ

林

同

同

櫻

同

林

櫻 井



雪隠て歐亞二州をまたにかけ

河井

本日も例會開かる。題は雪隠のジンヂアエール。イルクティック乗換の節、置場なくして便所に仕舞たればなり。

行幸は同じ流れの水なれば

河井

しはし艸木をくゝるジンヂア

なにがし

箱入のジンヂア戀にあてかれて

鼻持ならぬ始末なりけり

末はまたこゝに落來る水なれや

濱崎

便所にあさしシヨンベンサイダ

櫻井

雪隠に鎮坐ましますジンヂアエル

はゝかりあれとチト匂ふなり

じんしゃくも何あらなわにいましめの

林

配所の月を見るそかなしき

永々と雪隠つめにあひし身は

益田

瓶の中迄黄色とそなる

廿八日 明日はモスコイ着なり。朝益田氏扇子を失ふ。盗れたるならんと  
思ひしに見出せり。

取られたとおもひし品が見當りて

小脇

おゝきにそゝう二度の失策

今度は團扇の出來事なり。令嬢頻りにウオルガの流を眺め居られしに、吹  
き來る風に團扇は飛んで波間に落つ。益田氏側に立てる櫻井を不意に引き  
て此瞬間に一首唸れと云はる櫻井忽ち、

吹く風にうちわとられしお嬢さん

櫻井

アット云ふ内狂歌一口

益田氏は不取敢

もとくか税をぬすんたうちわなれば

益田

風のまにくいとまとらせよ

團扇を奪れし令嬢また室内に入らざる位なりしかば「マゝ早いこと」傍ら



に居られし令夫人

これはしたりはしかこけても狂歌とは

令夫人

げにもゆたんのならぬ旅かな

謹んで仲裁の勞をとる

林

旅の恥かき捨ならぬ世なれとも

うちわのことは風にまかせよ

仲裁に異議ありとて

河井

やぢ馬かあほき立てはなかくに

うちわ丈にはおさまりはせじ

令夫人より河井に贈らる

日敷へし旅のうさをも忘れけり

さまく君か心盡しに

河井より令夫人の恵に答へんとて

なよ竹の憂ふし積る旅衣

君につゝかのなきそうれしき

廿九日 午後四時三十分モスコに着。今夜はホテルの寢臺にとまれるとて人々元氣附けり。メトロポールに投宿、何かと心忙しく歌も出でず。藤村氏倫敦より出迎に來たる。

三十日 午後十時モスコ發。ピタリスバーグに向ふ。櫻井濱崎兩人は此地に止まり、手荷物を受取り、ワルソウを経て直にベルリンへ出で、同地にて落合ふ等なり。井上氏一行とも別かる。

七月一日 朝九時ピタリスバーグ着車。歐羅巴ホテルに投宿。市中見物。公使館訪問、公使よりの招待等にて多忙を極む。此頃日没は午後十一時にて、朝三時には日出づ。夜間も街路向側の文字を読み得。恰も我薄暮なり。氣持何となく不愉快なり。露國に入りて感あり

あわれさを何にたとへん民草の

益田

生ひ出るまに霜のかゝれる



ペートル大帝の廟に詣て、

いや高き君の績を仰きては

河井

涙にくるゝさみたれの空

二日 午前十一時五十分發にて、伯林に向はんとす。出發間きはに銀行に行きたるに、倫敦よりの送金手續に間違ありとて、金を受取る能はず。將に進退谷らんとし、辛くも乗車するを得たり。

つふすへき面目玉をとりとめて

河井

ろしや出ればアカンベルリン

いかにせん時間はせまるかねとれす

小脇

やつと間に合ひピエ都にけ出す

三日朝は既に獨逸に境の入り。河井は是より客分なりとて大威張り。

ながくとロシヤの重荷打あろし

小脇

ドイツでもしよるおれはしらね

客分になりて河井はグ、をやめ

同

まつか(わ)のありてロシヤも無事通過

同

けふメルリンに入るを目出たき

午後七時伯林着。プリストル、ホテルに投宿。豫期の如く、櫻井濱崎兩人に合す。兩人のワルソウを發せんとせるとき、一露漢手提を奪つて走る、逐ひかけて取戻すを得たりと。

あろすけのすりを捕へてよく見れば

河井

なる程これはワルソウな奴

ワルソウと見る間にかばんひつさらへ

小脇

つかまへられてくらしい身となる

四日 幾組にも別れて市中見物に出懸け、福田氏は公園に赴き銅像に見とれ背後より來たる荷馬車に氣附かず、取者怒つて鐵拳を喰はす。

ドイツたと問ふひまもなくうしろから

河井

ポカリやるとはヒデー五郎つき

午後十時三十分、伯林發。益田及藤村兩氏は先發へグに赴かる。瀛車中



にて

朝飯は獨逸盡めしベルギーで

あとのヨーロッパ、フランスでのむ

デア、ニエツト、ヤー、ヤー、ナイン、ウヰ、ノンか

すめはエリスとノーのかけあい

五日、キヨルン、リエージ、等を経、午後三時、カレに着。エムプレス號

に乗船。二時間計りにて、ドペーに達す。倫敦店員に出迎はる。瀛車より

田園を眺む。清潔感するに堪へたり。

英吉利の案山子帽子と靴をはき

コーバーク、ホテルに投宿。六日益田藤村二氏來着。益田氏の手帳を乞請

け寫し取る次の如し。

歐洲に來つて

うら表見るとおどこそさめるらん

まへにてすませこゝへ來る人

四〇

小 脇

同

河 井

佛國のカレイヨリ英國のドーバーを渡る時

かれこれといふ間もあらず友の邦

まもりのとふは見へにけるかな

和蘭の田園の様を眺めて

牛馬も家の子とこそ見へにけれ

なれてつかふるさまのゆかしさ

倫敦滞在中三井及益田兩氏は各地に旅行せらる。益田氏ドンカスターアの宿

にて、

片田含むさきやとりもうつくしき

あるし振りにて人もとふらむ

或日藤村氏、益田氏を日本俱樂部に案内せんとして途に迷ひたれば

案内とともひの外の不あんない

辻行く毎にきいたふしむら

何かの話の折なり、益田氏河井の手帳に記さる

益 田

四一



めし喰ふてぞたちし我そひもしくも

唐もろこしをなにくわるへき

河井答へて

腹へれはとうもろこしもいとわねと

あとて財布の下痢は受合ひ

隨行の某ラツバ節を試みしとして示さる

とかくおともと云ふものは我身て我身かまゝならぬ

たまにやちやちをすつばかし行きたい處かたんとある

益田氏の室にハイドパーク朝景色と、老婆燈前に針を執るの油畫あり。何

れか購はるゝなりと聞きて、或人潜かに

君を知るハイドパークの朝景色

三ポイントよりたされ不申

益田氏老婆の方を購はる

大翁か召されし額のお土産に

先づ奥さんかちよろこびなり

河井は近く露國視察に赴けは、益田氏爲めに三井俱樂部に鋤燒會を催さる

席上にて

のふく／＼とこれより國へちかへりか

あすより立ちてこゝを猿丸

林の別號を人丸。櫻井を業平、河井を猿丸と云ふ。皆西比の二字を冠す

西比利亚瀛車中益田氏より贈たれたるなり。

ウオルガ河渡るもうれし野も草も

かはい歸るを松之介哉

又してもなれし西比利亚戀しとて

馴れぬ都を猿丸の君

牛を食ふて河井を送る

旅衣うしとは云へとかはい。子の

無事のおとつれわれ松之介

益 田

櫻 井

濱 崎

林



かわい子に旅をさせたるお袋の

今日か明日かとまつの介哉

人丸にせんをこされて猿丸か

肉くひなからギユの音も出す

いさゝらはあすはお先に立田川

から幕内にお目にかしらん

廿七日 河井倫敦出發伯獨を経て露國に赴けり。是れより以下同人の日記より抜記す。

佛獨の一人旅。

唯一人木から落ちたる猿丸か

目は動かせと口はさかれす

佛獨の永き闊路をたとりつつ

ロシヤに入りて夜は明けにけり

伯林より露都に到るの途上、懷舊の情に耐へされは

かく迄に物は思はし故郷を

我身ひとつにかしま立ちせは

八月一日ピリタースバーグ着。滞在中のことなり獨り讀書爲し居りしに折柄日曜日なれば、各寺院の鐘聲一時に鳴響き、讀めとも更に頭に入らず腹立しくて

持つもかね持たぬも金のろすけとの

外は借金うちは頑々

十九日添田氏等と共にモスコイを出發。或日雀が岡に上り遙かに西方を眺めて

友もなき雀が岡の夕暮に

過ぎし旅路の思はるゝ哉

又

その昔こゝて奈翁ににらまれて  
モスコイ市にてあやうかりける



九月八日バルチック沿岸リーガへ赴く。此地は全然、獨逸人の勢力範圍にて、露人は三割に過ぎずと。用語は獨語を普通とす。市街潔く氣候溫和。公園に行けば、花の如き美人三々伍々相携へて遊ぶ、露國に於て得易からざる仙境なり。

リーガよいとこ青葉かしげる

繁る木蔭に百合牡丹

住民の腦中露政府なし、殆んど獨立國の感あり。

よしやろすけに身はまかすとも

主に見せたいわしの胸

ワルソウに赴けるは十二日なり。ポーランドの舊都なれば、住民露人を見ること讐敵も管ならず、地に露字新聞一あり。住民は讀むを恥とす。

かく迄もにくきろしや文字新聞紙

手をたにふれぬ人心哉

公園は舊王宮なり。古跡を存するのみ。規模宏大、園に接して露兵營あり。

園中池あり、白鳥浮ふ。

今はたゝ訪ひ來る人も水鳥の

夢おとろかすカザアの聲

そよ／＼と木梢をわたる秋風に

旅の心のいそがるゝかな

亡國の民とよはれて丈夫か

このありさまをいかんとや見ん

魚躍る池のほとりに猿丸か

たゝぼんやりと小首かたくる

十五日、キエフ著。此地は往昔の都なり。有名の寺院多く、我國の京都に比すべし。馬車を驅つて市中を見る。

また寺の前でとゝまる馬の尾の

なかく／＼しくも馭者の講しやく

十七日オデッサ著。福田領事佐々木書記生に面會。日本人は他に石阪中佐



あるのみ。皆舊知なり。住民には猶太人多く、由來猶太人虐殺の行はるゝを以て名あり。今に至つて争鬪絶へず。

黒海の波靜かなるオデッサに

あらきは人の心なるらん

罪もなき民草屠る其手にて

十字架をかくあはれ鬼人

人間とかほちやともし相場なる

國は文明民は正教

内地何所を見ても、此く迄にとは思はさりし露國內部の無秩序實に評すべき言葉もあらず。

ロシアへちぢやるなら急てちぢやれ

ロシアはかぼちやの花盛り

餘り悪口は言はぬかよかるへし。序なから記す、或人拙號霜傑の意義を問はれたれば

いくとせもふる雪霜に松翠

かはらぬ色のうつくしき哉

廿六日、午後二時ツエサレイグ非チ號に便乗、オデッサを發す。船は黒海北岸即ちクリミヤを過ぎ、コトカサスに赴くなり。パトームとの間に寄港二十箇所。此地露國中最も溫暖の地方にて、露人の極樂淨土なり。クリミヤは菓實を以て著名なり。

苦利身屋商賣なによと問へは

ぶどう水瓜に梨眞桑

三十日、午前七時、起床甲板に出つればスフォーム港なり。コトカサスの山々空に聳え。巍峩として白雪を頂く。最も高さものをエルブルースと稱す。海拔壹萬八千尺。此時黒海風絶へて水は油の如く、然かも波岸を洗つて聲あり。山岳の壯宇宙の大真に未だ曾て見ざる所なり。

白砂の山々空につらなりて

みどり滴たるスフォームの里



又

沖は静かにかもめが眠る

山は白雪幾千里

夜八時パトリムに著す。石油の積出港なり。會々武藤高柳二氏の中央亞細亞よりオデッサに歸へるに遇ふ。

十月二日、朝三時、起床。チフリヌへ向け出發。夕方に着せり。地はコーカサスの都にして、住民グルン種族多し。容貌瘠惡。市中を行くも不快と危険とを感す。街端に温泉あり。水豊かにして旅情を慰するに足る。硫黄泉の如し。然れとも其設備に至つては採るべきなし。

ちふりすの玉の出湯にゆあみして

旅のうさをはしはし忘るゝ

四日午前五時起床、一番汽車にてバクトに赴かんと欲すればなり。コーカサス地方は、風土氣候、露本土と異り。耳目に觸るゝもの總て新らしく、地方の状況も成るべく見落すましと思ひたれば、晝行き夜宿泊と定めたり

午後八時バクトに到る、全市石油業を以て成る。パトリムより此地に至るの鐵道は官設にして、切符切に中少尉從事す。普通の係員にては制し切れざる故なるべし。風俗の淳厚ならざること思ひやらる。

官設の鐵道なればコーカサス

切符切るにもちゆうゐするなり

人や喰ふ鬼の血古巢のかれいて

馬喰ふといふに又もひつくり

此所より裏海を東に渡り。中央亞細亞に出てんは面白かるべけれど、露政府は外人の入るを許さず、ウォルガを遡り、船にて各都を見物し、サマラに赴かんかウォルガ流域は既に降雪あり、且行程二週間餘りを要す。此等尙忍ひ得るとするも、不快なるはコレラ病の流行なり。ウォルガの河口アストラハンに始まり、各地に傳染、西比利亞迄及ぼし此地にも日々新患者を出たす。されはコーカサスを迂廻し、鐵道に由り歐亞の幹線に出つるのあらざるべし。



外コーカサスはペルンヤ、トルコに境し、隨て住民の種類も頗る錯雜。ギリシヤ人あり、アルメニヤ人あり、一見未開の状態を現はす。倫敦を出てより、既に約七十日、英獨佛埃露の各地を過ぎ、今や身をコーカサス西端の客窓に置く、孤身燈前萬感湧出し、更深け人靜まるも眠をなし難し。

數ふれば英佛獨におすとりや

ろしやは南のオデッサを

渡る黒海コーカサス

土耳其ベルシヤか見ゆるそへ

露西亞は寺てもつおてらのやねて

さんの光かピカ〜と

劍と鐵砲はろしやのたがよ

たがゆるめはバラ〜と

七日午後九時愈々バクを發し、歸途に就く、裏海に沿ふて北に走る少許西に折れてコーカサスの北方に出て、テイホレツカヤ、ツアリツキン、ボ

ウオリノ、バルシヨウフの各停車場にて乗換へ、十一日午前九時本線ペンザ驛に着す。

荒浪の裏海の浦をなかめつゝ西へまはれは

コーカサスあれはカスペクエリブルス山々

積るしらゆきのとけてうれしきウオルカ河

夜明のとりか鳴くわいな

ペンザを發車してより、腹痛あり。屢々下痢を催す。用意の薬は、是迄更に必要を覺へざりし故かばんに入れ、手荷物に預けたれば、取出すに由なし、ざりとして停車場の醫師に就き之を求めんか、コレラ流行の際避病院收容は知れたとなり、斯くては西比利亞の地獄へ轉籍の外ある可らず、まよ飲まず食はずに暮らして経過を見るには如かすと、横臥すると二日間十三日に至り、幸にして痛も減し、下痢も止りたる如くなれば、初めて紅茶とソップの少量を試む。

ゆふべより腹の痛みていく度かかよふこひ路も



千鳥足こゝはコレラの名所ぞと聞けば心もなかなかに弱りはてたる汽車の窓旅はつらいぢやないかいな

歐部露西亞の大體を見來たれば、西比利亞の事情は自から了解せらるゝならん。西部西比利亞の主なる都會は、トムスク、オムスクなり。是非に見物したしと豫期し居りながら、悪疫に妨げられ、下車するを得ず。ウオルカ流域を過ぐるの時、雪既に曠原を掩ふて、正に我嚴冬に比すへかりしに、東に進むに隨ひ積雪のますく深きを覺ゆ。天地荒寥往途の好景なし。

野も山もいとさびしくなりにけり

秋の錦は雪にかくれて

途中イルクーツクに下車。哈爾濱を経て浦港に着せしは廿五日の朝なり。故郷に歸へりたる如き心地にて骨身の緩む許り、歌も何もあつたものにあらず。

既に猿丸に別れ尋て又小町伊勢家持貫之赤人業平等の諸歌仙に別かる。實に吾は一人塵となれり、復た誰に依りてか教を仰かんや。況や倫敦滞在中は百忙無一閑韻思全く沾渴せしに於てをや。終に一首の笑を買ふ能はざりしは慚愧の至りなり、十月五日大陸旅行の途に上り、十一月七日歸倫の後、同十五日渡米して、留まると月餘。明治四十一年一月廿五日、布哇を経て、歸朝す。其間山河草木の變化、人情風俗の異同聊か自ら紀念とする所のものを得たり試に道順に録して、シベ歌仙の一粲を博し併せて卷末を汚すと爾か云ふ

林 生

アントワープにて

小波さへ立たぬ川邊に百千船安土和埠の名も讀まれけり

ロツテルダムにて

揃ロツテルダム繁昌の大荷船客はどいつで主はをらんだ

ヘーグにて

女籠のたけたるさまに似たるかな垢ぬけしたる平愚のまち



ハンボログにて

中々に運輸交通繁忙區英米國も油斷大敵

入英以來百忙無一閑伯林途上

秋晴可人始催詩思

忙中無夢到詩句 容易半年老道途

今日秋晴多快意 青林黃樹入王都

ウインにて

ウインにはあらてルインの六道に俄鬼店(珈琲店)の數限りなき

ベニス途上秋色絶佳

紅葉を黄葉(應用)したる毛唐の秋

ベニスにて

淺草の水族館に送りたしベニスの町を小包にして

言の葉の寄りベニスべき跡訪へば昔は馬鹿をしたるものかな

ロイヤルにて

野次馬の名所舊蹟騒ぎにて老馬の町も賑ひにけり  
羅馬てふ馬は死しても千金の骨を殘せる寺の一むら  
伯林を見て羅馬見て興亡の道を尋ぬる吾心かな

ボンペーにて

權兵衛の蒔げる種にはあらねとも堀出して食ふ里鳥かな

ミランにて

みらんとそ思ひしことの仇なれや汽車の都合でほんのす通り

ルサンにて

記ルサント筆とる暇もあらはこそ名山勝水相綯纏

巴里にて

老ぬると人は云へとも中々に大陸にては矢張りバリク

倫敦に歸りて

大陸を廻りてぞ知る倫敦の高きタワーの彌やに高きを

大西洋上百事



此處も亦英と獨との睨み合ひボートレースの本場所として  
船毎に送る獨逸の移住民菓子飴りかも纏て食はれん

紐育にて

マツチ箱並へた様ナ紐育只金儲けに火花散しつ

恐慌に就て

大火事で助けの水が入用區降るアメリカも及びなければ

モルガン店頭にて

名にし負はゞイザ言問はん此頃はモーカールづきやモーカーランやと

バッファローにて

バッファローで倍拂ふたる馬車賃に夕餉の酔もさめ果てにけり

ナイヤガラにて

來て見れば評判程はナイヤガラ兎角浮世はこれで目度タキ  
左りながら迎も日本にナイヤガラならは土産にさけて雪瀧  
有りがたき言の濫觴を今と知る世にナイ唐の冬瀧を見て

ボストンにて

何となく昔のつきたるボストン府多少昔の偲はるゝかな  
雪暮れていつか夕日もボストン府心淋しき厂の一聲

ワシントンにて

麴町區ほともあらぬ華盛頓來て見てそ知る乙ナ國柄  
此處斗り其盛徳の傳はりて居り心地よき和親敦かな

ヒラデルヒヤにて

染々と昔の事を思はする日は出る冷やの朝ほらけ哉

ピッツバURGにて

英獨を尻目にピツとつばを吐くユーエスチーの凄まじきかな  
梅ヶ枝の洗手鉢にはあら金の叩てそ出るカーチギー哉

シカゴにて

四十四カ五かは知らねどクリスマススイブを旅寝に思ひミチガン  
産物の中央市場丈けありてチカゴる見さる町の繁昌



ロッキーマウンテンにて

見せはやな小島の國の人々にロッキーマウンテンの雪の氣色を  
果てしなき青と白とのかけ競べロッキーマウンテンの雪雲の汽車

桑港にて

元日や朝日照り込む旅の窓

サクラメント矢鳥氏の成功を聞いて

芋畑カリホルニアの夕氣色御國の歌も聞こゆなりけり

桑港出發青木大使一行同乗

一度は二人に別れ三フラン四スコで又も五六人連れ

所感

いつかせん大和男の子の船遊サンドウィッチを辨當にして

布哇にて

斯くなればヤンキー連も手か出せず何と言はふがハワイさま様なら

青島ハワイの跡に望月のさしこむ姿キーンにホノルル

夏寒く(倫敦) 冬温き(布哇) 裏表情けの道を歩む旅かな

太平洋上にて

赤はげの沖の小島もあらまほしみづみて暮らす長き舟路は

日月出海又入海 萬里鵬程碧波間 帆影不飛魚不躍 天邊何處是關山

關山何處水三千 唯有月明照客船 昨夜夢魂飛海角 芙蓉玲瓏當顏鮮

ウラル山アルタイ山にロッキーマウンテン富士を見代ゆる山のあるかは

長々の旅路もふしの山を見て思はず叫ぶ萬歳の聲

一廻り廻はりて跡を眺むれば地球の上も長し短し

丸呑にしたる地球を消化して黄金のクンをたれんとを思ふ

大洋の船路を照す月影も明日は團欒の庭に眺めん

全地球廻はりて歸る春霞ふしの高嶺に立そめにけり

(了)



昭一九、一〇、一二  
霞ヶ関

昭一九、一〇、一二



